

見方・考え方を働かせながら深く学ぶ子供 ～新聞やタブレット端末を活用して、「分かる・楽しい」授業を創る～

上越市立大潟町小学校

1 学校の概要

本年度、創立 148 年目を迎えた当校は、霊峰米山や日本海に沈む夕日が間近で見られる美しい景観の中にある。

大潟区唯一の小学校で、子供数は 400 人。校区は広く、徒歩だけでなく、通学バスや路線バス、電車を利用して登校してくる子供もいる。

特色ある活動の一つに「どんど」（生活科及び総合的な学習の時間）がある。「どんど」という呼称は、大潟区九戸浜にある「どんどの池（どんどの石井戸）」に由来する。砂丘地にあって夏場も枯れずにこんこんと水が湧き出るどんどの池にちなみ、どんどの時間には、こんこんと湧き出る子供の思いや願い、子供のみずみずしいアイデアを大切に、子供と教師で活動を創り上げていくことを願って付けられた。

2 NIE 実践のねらい

当校は、今年度「見方・考え方を働かせながら深く学ぶ子供」の姿を目指した各教科、領域の授業創りに取り組んだ。

見方・考え方を働かせながら深く学ぶ子供の姿は、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする姿と考えられる。新聞やタブレット端末を活用した授業により、それらの姿の具現を目指すとともに、当校なりの「深く学ぶ」子供の姿を見いだしていきたいと考えた。

＜「深い学び」へと誘う新聞の授業への位置付け方＞

○導入、展開、まとめなどの場面で教材の一つとして新聞記事を用いる。

○新聞記事そのものを指導内容として用いる。

※新聞記事には写真、グラフ、図表なども含む。

3 本年度実践の概要

（１）新聞を活用した活動づくり

8 月の職員研修で、当校の NIE アドバイザー川合紀子様に来校いただき、NIE の意義や実践のポイントを聞いたり、新聞記事を活用したワークショップを行ったりした。また、NIE 活動助成費で参考となる書籍（『これならできる！新聞活用—NIE 入門ガイド』『新聞で授業が変わる』）を購入し、職員に配付した。これらの取組により、活動づくりへの意欲が高まり、2 学期以降の実践につながった。

① 新聞を活用した活動一覧（2021 年度）

学年等	教科等	単元名等	新聞活用のねらい
1 年	学級活動		バラバラにした新聞をつなげるゲームを通して、新聞に親しむ。
2 年	算数科	長さ	記事写真の縦横の長さを測ることを通して、長さの測り方を理解する。
3 年	学級活動		新聞の写真を選ぶ活動を通して、新聞に親しみ、興味・関心を高める。
3 年	国語科	きせつのたより	秋の様子の写真から俳句を作り、秋の行事に関心をもつ。
3 年	社会科	地域の安全を守る	消防に関する地域の新聞記事から、自ら身を守るについて考える。
4 年	算数科	がい数	新聞から概数を探すことを通して、身近にある概数に気付く。
4 年	国語科	新聞を知ろう、 作ろう	よりよい見出しを付けるために、実際の新聞を使い、見出しの工夫を知る。
5 年	国語科 社会科	新聞の情報を 読み取ろう	レイアウトを意識しながら、自動車工業について新聞にまとめる。
5 年	国語科	意見文を書こう	新聞の投書をモデルにし、自分の考えを明確にした意見文を書く。
6 年	総合的な学習の 時間	大渦かっぱ プロジェクト	かっぱ伝説に関する新聞記事を読むことで、興味・関心を高める。
6 年	理科	火山の噴火と地震	阿蘇山噴火に関する新聞 6 社の紙面比較から、情報収集・活用能力を養う。
特別 支援	自立活動		新聞から食べ物の写真を探す活動を通して、新聞に興味をもつ。
特別 支援	国語科		新聞から今までに習った漢字を探す活動を通して、新聞に興味をもつ。
総務 委員会	特別活動	文字探しゲーム	縦割り班の 1 年生の名前を新聞から探すことで、1 年生の名前を覚える。
図書 委員会	特別活動	文字囲いゲーム	文字囲いゲームを通して、縦割り班のメンバーとの仲を深める。
給食 委員会	特別活動	食べ物新聞づくり	新聞には、食べ物に関する記事が多く載っていることに気付く。
総務 委員会	特別活動	新聞スクラップ	新聞から差別やいじめの記事を見つけてみんなに伝え、考える機会にする。

② 公開授業研修（2021年度）

	学年	教科	単元名（主題名）	協議会 講師
1	6年 10/11	総合的な学習の 時間	大潟かっぱプロジェクト	NIE アドバイザー 川合 紀子 様
2	3年 11/15	道徳科	ふるさとの伝統文化を大切に	上越教育大学 中平 一義 様
3	1年 12/9	生活科	いきものだいすき	NIE アドバイザー 川合 紀子 様
4	5年 12/9	総合的な学習の 時間	大潟町 再現	上越教育大学 中平 一義 様

※第3回，第4回は，1年次のまとめの授業研修会で実施。

詳細については，「4 授業実践例」を参照。

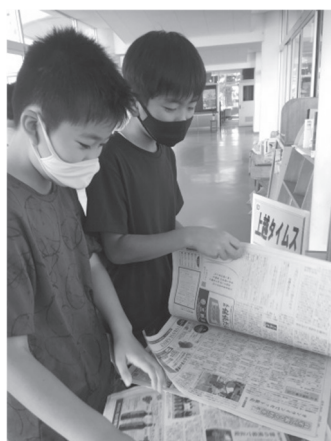
（2）校内の研究体制（組織）づくり

全職員で研究を進めるために，グループ分けを行った。

グループ	授業実践グループ	環境整備グループ	運営グループ
内容	・指導案作成 ・指導案検討 ・授業公開協議会の進行等	・新聞コーナーの設置 ・NIE 情報掲示等	・渉外，要項，資料作成 ・授業公開（研究会）運営等

（3）新聞に親しむための環境づくり

環境整備グループが中心となり，子供が気軽に新聞に親しむ機会や場づくりに努めた。廊下や階段の踊り場の掲示板を活用し，新聞を置いたり，制作した壁新聞を掲示したりした。



【廊下の新聞コーナーで読む子供】



【差別やいじめを考える壁新聞の掲示】

4 授業実践例

(1) 1年2組 生活科 「いきものだいすき」 授業者 堀川瑛里那

① 本時のねらい

ヤギと自分との関わりについて、伝えたいことを新聞のコーナーで表現する活動を通して、自分自身やヤギの成長、気付きを振り返り、伝えたいという気持ちを高める。

② 新聞活用により期待する子供の姿

新聞づくりを通して、ヤギとの関わりを振り返り、ヤギへの気持ちや伝えたいという思いを膨らませる子供。

③ 子供が「見方・考え方」を働かせる「深い学び」のポイント

12月1日のヤギの飼育活動の終了後、子供はヤギとの関わりで気付いたことや感じたことを世話になった人や家の人に伝えたいという新たな願いをもった。そこで、堀川教諭は、これまでの自分とヤギとの関わりを新聞にする活動を構想した。子供は、「大きく元気になってほしい」「仲良くなりたい」という思いをもってヤギに働き掛けてきたことで、ヤギの変化や成長に関わる「見方・考え方」を持っている。それらの「見方・考え方」を生かした新聞づくりを通して、ヤギと自分との関わりやそれを通して成長した自分、自分がヤギにしてきたことを俯瞰的に振り返ることが「深い学び」の姿と捉えた。

公開授業では、前時で整理した「伝えたいこと」を新聞の中で表現する方法を考え、ヤギとのエピソードと新聞のコーナーを考える活動を繰り返した。「らてちゃん(ヤギの名前)は、このときすごく喜んでいたよね」「そういえば、こんなこともあったんじゃない」「懐かしいな、会いたいな」というヤギへの親しみを子供がより一層もつことをねらった。伝えたいことを絵や文、クイズなど様々な方法で表現できることに気付かせ、ヤギとの関わりを振り返り、伝えたいという思いを強くする子供の姿を期待した。また、新聞づくりは、これまでの絵日記とは違い、相手意識が伴う言語活動である。自分で作った新聞が相手に届き、思いが伝わる喜びや充実感を得られる活動を目指した。

④ 本時の子供の姿から本時の授業を考える

前時の新聞づくりの振り返りの場面では、子供から「(まだまだ余白が多く)さみしい」「絵を描きたい」「4コマ漫画」「問題作り」「なぞなぞ」などのたくさんの「たい」(子供発の〇〇したいという本学年独自の表現)が聞かれ、書きたい気持ちの高まりを感じた。すぐにでも書かせたいところではあったが、堀川教諭は、さらなる紙面の充実を目指し、新聞を活用したコーナー調べを子供に投げ掛けた。

子供新聞を班ごとに配付すると、子供は勢いよく調べ始めた。しかし、このコーナー調べは1年生にとって難しい活動であった。始めこそ「クイズ」「まんが」「にゅうす」と付せん紙に書いていたが、しだいに、「さかな」「おすし」「クロマグロ」と、言葉探しになっていったからである。

ただ、その事実以上に、この時の目を輝かせて新聞に向かう姿が印象的で、教師の「今日は大人の新聞も用意しました」という言葉に「ヨッシャー！」と反応し、楽しそうに探そうとする姿からも意欲の高さが伺えた。

この調べ活動により、子供の学びの方向が一時離れたが、共有場面における子供と教師とのやり取りで戻すことができた。

C；歴史コーナー！

T；らてちゃんならどうなる？

C；レシピコーナー！

T；らてちゃんレシピになるよね。

などと、堀川教諭は多くは語らず、子供に問い返し、考えるきっかけを与えた。このやり取りこそが新聞とらてちゃんとをつなぎ、本時でねらう深い学びのための教師の出場であった。

子供が新聞づくりに取り組めたのはわずか10分ほどであったが、多くの子供は水を得た魚のごとく、大好きな白い紙に向かった。Y子は、らてちゃんの絵を2つ描いた。授業後に聞くと、「間違い探し」のために2つ描いたとのことであった。Y子にとって、新聞にあった漫画や間違い探しがヒントになっているのかもしれない。

ただ、本時でねらった深い学びに迫れたかどうかは疑問であった。どうすれば迫られただろうか。新聞とらてちゃんとをつなぐきっかけは作っていただけに、あとは何が必要だったのだろうか。

協議会では、「これまで書きためてきたらてちゃん日記が子供のそばにあったらよかったのではないか」という意見が出された。そこにはらてちゃんへの思い、自分の関わりが記されているはずで、5か月の記録からは自分自身の成長にも気付けるのかもしれない。その活用により自分だけのらてちゃん新聞が作られていくのではないかということである。

まとめの時間では、「もっと書きたい」「新聞は裏もあるから裏にも書きたい」と、再びたくさんの「たい」が聞かれた。次につながる時間となった。

⑤ 川合 NIE アドバイザーから指導いただいたこと

川合さんは、1学年での新聞作成型＋新聞活用型の授業に驚かれていた。つまり、本時は高度な実践であったのである。以下3つの視点から授業を評された。

ア 伝えたい思いの実現のための新聞づくり

ネタ帳の用意は子供のやる気につながる。また、新聞づくりにつながらなそうなコーナーを「特集記事」とくくってもよかった。



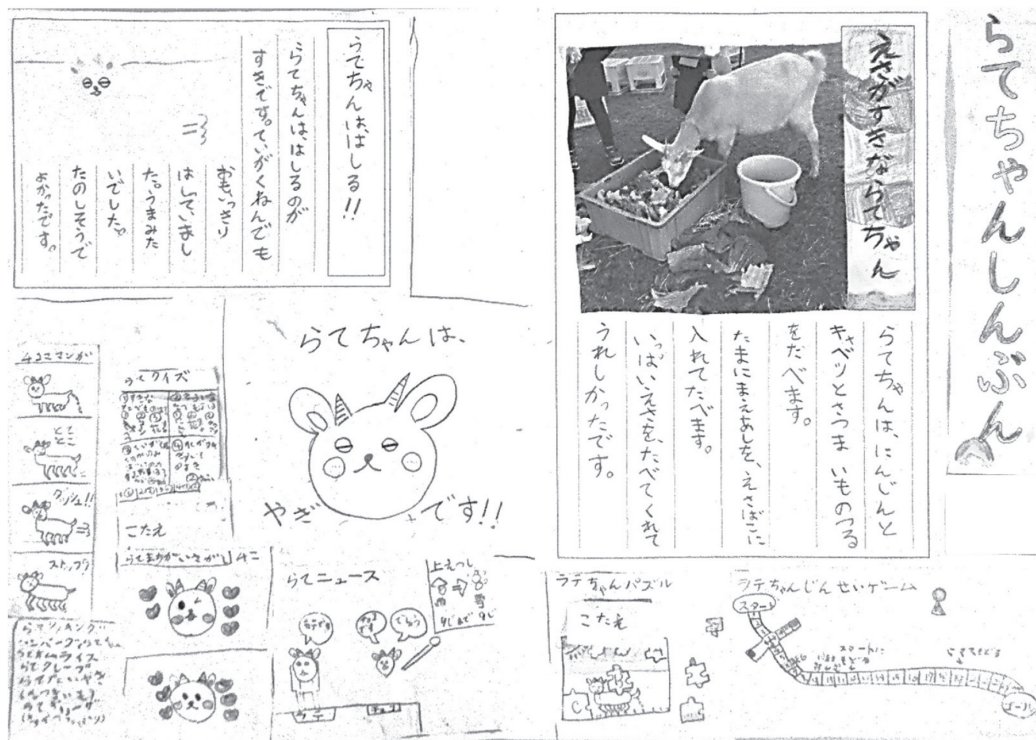
【新聞のコーナー調べの様子】

イ 子供が安心して作成できる環境づくり

教室背面黒板の新聞づくりに関する掲示物や、教師が子供の考えを否定せず、許容する受け答えが子供に安心感を与える。

ウ 新聞と ICT の活用

新聞記事や子供の制作中の新聞を iPad で撮影してテレビに映すなど、ICT を効果的に活用していたことがよかった。



【子供が作った「らてちゃん新聞」】

(2) 5 年 1 組 総合的な学習の時間 「大潟町 再現」授業者 大橋 美紀

① 本時のねらい

池作りについて、活動を振り返ったり、社会や環境の問題から考えたりすることを通して、自分たちの池やカメについて多面的に捉え、今後どうしていくのがよいかを考え深めることができる。

② 新聞活用により期待する子供の姿

新聞記事をきっかけに、自分たちが大切にしている池やそこにいるカメのこと、そして環境問題や法律のことなど多面的に捉え、今後、自分たちの池やカメをどうしていくかを自分事として考える子供。

③ 子供が「見方・考え方」を働かせる「深い学び」のポイント

子供は、これまで、中庭に自分たちの大潟町を再現する活動に取り組んできた。特に、池作りの活動では、大潟区にある朝日池と鵜ノ池に見立てた 2 つの池を作り、潟川や新堀川の代わりとなる U 字溝を埋めたり、近くの農業用水から生き物を採取したりして「再現」に力を注いだ。子供は、カメが顔を出したり魚が増えたりする様子から、池もそこで暮らす生き物も大切に思い、中庭の「大潟町」は、自分たちの自慢の場所となっていた。

そこで、大橋教諭は、そのような思いをもっている子供に、外来種に関する新聞記事 3 つ (A)「新潟日報 2015 年 9 月 13 日」 (B)「上越よみうり 2021 年 9 月 10 日」 (C)「朝日中高生新聞 2020 年 5 月 25 日」) を提示することを考えた。

ニュース

外来種を考える

(A)

日本の生態系に影響

ミドリガメ飼育規制へ

環境省は「ミドリガメ」の名称で親しまれている「アカミミガメ」を 5 年後をめどに「特定外来生物」に指定して、段階的に輸入や飼育を規制する方針を固めた。8 月には対策費用の予算要望を行った。ペットとして飼われていたものが捨てられたり、逃げたりして、日本固有の生態系を脅かしているためだ。徳島県では特産のレンコンの新芽が食べられ、1500 万円の被害が出た。

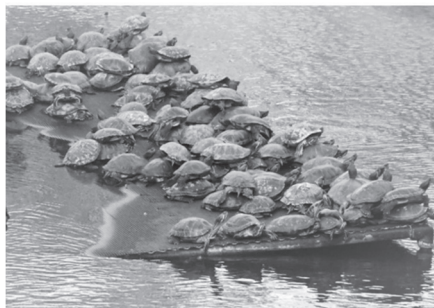
特定外来生物に指定されると、外来生物法に基づき、飼育や栽培、移動、輸入などが原則禁止となる。違反すれば懲役や罰金が科せられることもある。

どうして日本に？

食料



(C)



(A) 【ミドリガメ飼育規制についての記事】

(B) 【高田城址公園の堀に仕掛けたカメ籠を引き上げる公園管理人の新聞写真】(外来種を駆除する記事)

(C) 【大きな人工池の陸地で重なり合うミシシippアカミミガメの新聞写真】(外来種を保護している記事)

新聞記事は、同じ外来種の内容を扱っていても、「日本の生態系に影響」「厄介者外来生物」「“外来種”は悪者？」と、異なった見方、考え方をしている。自分たちの「大潟町」でも、世の中で話題になっている外来種問題が起きていくのではないかと自分事として考え、池にいるミシシippアカミミガメをどうしたらよいかと真剣に考える姿を期待したのである。

本時では、違う立場の人の意見を認め、理解しようとするとともに、「カメがかわいいから」「問題になったら怒られるから」という一面的、一時的な考えではなく、新聞記事の内容を参考に意見交流をしながら、「多面的な見方、考え方」を働かせ、自分（自分たち）の考えをよりよいものにしていく姿を「深い学び」と捉えた。

④ 本時の子供の姿から本時の授業を考える

本時では、上述の 3 つの新聞記事を提示し、話を始めた。多くの子供の最初の意見が「このまま飼いつけていく」であった。カメを「手放す」と主張した子供は 1 人であった。本時では自分と異なる意見を聞いたり、それを認め理解しようとしたりする過程で考えを深めていく姿を期待していたが、なかなか活発な意見交流とはならなかった。

子供の意見交流がより活発に行われるために、協議会では以下のような案が出された。

○中庭にカメがいることで高田公園のお堀のように実害は出ていないか。
また、これから起こりそうな問題はないかを考える。

○「手放す」というと駆除のイメージが強いので、駆除以外の方法を考えてみる。

○新聞記事に立ち戻って考えさせる。

他の地域ではカメによる被害などが出ているところもあるが、今のところ学校の中庭ではそのような実害は出ていない。新聞記事には「雑食で水草や魚類・甲殻類を食べる。寿命は 30 年から 40 年」や「堀のハスの新芽を食べている疑いがある」とある。「中庭の生き物を食べて生態系を壊してしまうかもしれない」「植物が食べ尽くされてしまうかもしれない」といった実害について考えると、意見が変わってくる子供も出てきたのではないだろうか。

また、協議会では、情意面からの意見が多かったことから、そのような子供に客観的に考えさせることが必要だったのではないかという指摘があった。自分たちのことを客観的に見られるということは、それ自体が多面的な視点につながるものである。そのためにも、新聞記事と自分の考えを関連させることが重要であった。自分の思いから出てきた意見を「それでいいのだろうか」「場所や生態系のことも考えながら出した意見なのか」と振り返ってみることで、子供の考えを広げ、深めることができたのではないだろうか。

⑤ 中平准教授から指導いただいたこと

ア 事前に子供の認識を把握していたこと

子供にとっては、「自分が大切にしたから」「駆除するのがかわいそう」「頑張りを無駄にしたくない」といった気持ちがあり、それらを教師がよく認識し、授業構成に生かせていた。

イ 「誰にとっての問題」なのかを考える

今は自分たちの問題という子供の意識であるが、それを、自分たちの住んでいる大湊区まで広げていくと、中庭で収まっていることを大湊町へと拡大していくことになる。考えている空間を広げていくと議論も面白くなる可能性がある。

5 成果

各学級等での新聞を活用した授業（活動）実践の推進を図れたこと

私たちは、カリキュラムを見渡し、「この教科で、この単元で、この時間で、新聞を活用した授業を子供とできそうだ。子供としてみたい。」という思いをもち、実践を積み重ねることができた。

また、学習内容（教科書の内容）と本時の見方・考え方を働かせる子供の姿を思い描き、どんな新聞活用（記事や写真など）を、本時のどこで、どのタイミングで、どのように使うのかを考え、深い学びに迫る授業実践を図った。

今後も、教師は普段から子供が新聞に親しむような活動を意図的、計画的に行い、新聞に慣れさせていくことが、2年目のよりよい授業実践につながるものと考えている。

（南雲 民人、植田 雄也）